

『萬葉集抜書』と『宗祇萬葉抄』との関係 —中世『萬葉集』享受の基礎的研究のために—

景井 詳雅

一・はじめに

中古と中世における萬葉歌享受の違い、その際たるものの一つに、仙覚校訂本（以下、「仙覚本」と称する）の有無が挙げられよう。仙覚は従来の『萬葉集』の本文・訓読を整理し、自らの見解をも反映させた新たな『萬葉集』テキストを構築した。仙覚本は『萬葉集』に関心のある中世の人々に読まれ、近世、近代、現代へと受け継がれていく。その一方で、中世に書写、披見された非仙覚本（嘉暦伝承本、紀州本、類聚古集など）も現存し、中世へと継承された王朝和歌の歌書に見える萬葉歌もまた非仙覚本の本文である。非仙覚本と仙覚本の双方の本文が享受されていたというのが中世の萬葉歌享受の実態であり、そのことは今川了俊（一三二六―一四一四頃）の『言塵集』にも見えている。

万葉集は和詔の根本なれどもあまたの説不同なる故に、そむかぬ正説を知事大事也。凡は順が注第一也。俊成・定家・顕昭ばかり也。其後仙覚律師と云広材の物、号新点とてことごとく注

たり。其以前には未考の哥二百余首有り。されども、新点をば後鳥羽院の御代まであまねく不用。雖然、今連歌の寄合ばかりには每人用之歟。詠哥にはあまねくは不用也。万葉の哥用事は、定家卿の家には用哥を注出されたり。是を可為用哥云々。四百余首有にや。それも哥一首の中を用捨せられて、詞を貫出されたる也。（『言塵集』—本文と研究—・汲古書院による）

了俊の発言には彼自身の和歌・連歌における萬葉観も含まれていようが、和歌では仙覚本を用いないこと、連歌では仙覚本が用いられているらしいと述べていることは注意され、また、仙覚本の登場により、和歌や連歌に用いる『萬葉集』に動きが認められることも興味深い。そして、連歌と仙覚本との関係は二条良基（一三二〇―一三八八）が由阿（一二九一―一三七五生存）に『萬葉集』の講義を依頼し、貞治五（一三六六）年に実現したことに関係するだろう¹⁾。由阿は『青葉丹花抄』で萬葉歌と連歌とを関連づけた次の注釈を記している。

さほ河の水をせきあけて植し田をかるわさいねはひとり成へし
右連歌の始也。日本記云、日本武尊甲斐國酒折宮にて歌をも
て問給ふ。

秉燭者

にひまり兔玖波を過ていく夜かねつる
か、なへてよには九夜日ひにはとをかを

連歌の最初也。(『萬葉学叢刊中世篇』・古今書院による)

連歌と仙覚本のつながりは由阿と良基との関わりからすでに生じていた。良基はその後の康暦年間(一三七九〜一三八一)に『萬葉集』の講義を自ら行っている(『万葉集聞書抄』)。「言塵集」は応永十三年(一四〇六)年五月ごろには第一次本(初稿本)が完成し、以後改訂が行われていったと考えられている。²⁾『言塵集』の記述は良基の『萬葉集』への積極的な取り組み以後の、連歌師たちに影響を与えつつあった仙覚本の事情を物語っているだろう。³⁾なお、仙覚文永十年本に禁裏御本(文永本を底本として寛元本を校合した本)の内容を書き入れたとされる京都大学本の書写奥書には、由阿の名とともに今川範政(一三八四〜一四三三)の名も見える。彼にとつて了俊は大叔父にあたり、また、範政本人は禁裏御本を作成した人物でもあった。⁴⁾そして、その後に、和歌、連歌ともに大きな功績を残す宗祇(一四二一〜一五〇二)が現れることになる。

二・宗祇編抄出本『萬葉集』という仮説

宗祇は中世を代表する文化人の一人であり、後世への影響も極めて大きい。彼の残した著作は多数に及ぶが、その中には『萬葉集』に関連する歌書もある。『萬葉抄』と称されるそれは(以下、『宗祇萬葉抄』と称する)、早くも昭和三年に佐佐木信綱によって全文翻

刻が紹介された(『萬葉学叢刊中世篇』・古今書院)。「古今和歌集」「伊勢物語」などの注釈に大きな業績を残す宗祇の『萬葉集』に関する足跡を把握しておくことは、和歌・連歌研究や『萬葉集』伝来史の研究において十分に意義が認められるといえよう。

そこで、宗祇の『萬葉集』やその理解を知る上で重要な歌書であり、本稿で考察する歌書と密接な関わりを持つと考えられる『宗祇萬葉抄』について、その性格を明確に述べる『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー)の説明(中嶋真也氏執筆)を示しておく。

万葉抄(室町時代後期注釈書)宗祇抄、万葉集抄、万葉集注抄とも。宗祇著。文明六(一四七四)年から文明一四年までに成立か。お茶の水図書館(旧竹柏園蔵本)・彰考館本などに写本がある。『万葉集叢書一〇』に翻刻される。『万葉集』から四分の一ほどの一二〇〇首弱を抄出し、その三分の一ほどに施注している。その注の内容は、自説もあるが、仙覚『万葉集註釈』、由阿『詞林采葉抄』の説を紹介、要約するものが多い。宗祇の用いた『万葉集』に関しては、訓読のみに依拠した、次点本に依った、寛元本に依ったなどさまざまに推測がめぐらされている。また、『新古今集』の影響の強さも見届けられる。『万葉集』を抄出するにあたって、『万葉集』そのものと勅撰和歌集とを並べ立てながら、結果として新たなテキストを生み出すことになった宗祇の営為の意義を考察すべきであろう。

『宗祇萬葉抄』には、小島吉雄氏「宗祇と兼載の萬葉集研究」（『萬葉集大成11』特殊研究篇・平凡社・一九五八）、両角倉一氏『万葉集』の享受」（『宗祇連歌の研究』・笠間書院・一九八五）、小川靖彦氏『萬葉学史の研究』（おうふう・二〇〇七）などの論考及び、渋谷虎雄氏の『古文獻所収万葉和歌集成 室町前期』（桜楓社・一九八四）、日本古典文学大辞典』（岩波書店）の「萬葉抄」の項目が先行研究として挙げられる。だが、『和歌文学大辞典』でも述べられているように、『宗祇萬葉抄』の実態やその評価は明確には定まっていないう現状がある。とくに、その萬葉歌本文は、非仙覚本に依拠したとする見解（小川氏、渋谷氏）、仙覚本に依拠したとする見解（小島氏）がある上に、『宗祇萬葉抄』の萬葉歌本文には宗祇による改変本文を含むとする見解もある（渋谷氏、小川氏）。

諸氏の見解から、宗祇が萬葉歌本文に対して能動的に関与したことが推測される反面、その元となった本文の性格は見えづらいついのが『宗祇萬葉抄』の実態なのであろう。したがって、宗祇がどのような『萬葉集』とどのように向き合い、その中で結実した宗祇の歌書には彼の『萬葉集』に対するどのような理解が認められるのかなど、宗祇の『萬葉集』享受には検討されるべき事柄が依然として多く存在すると思われる。そして、その一つに『宗祇萬葉抄』の成立過程の問題がある。

『宗祇萬葉抄』には、その成立より前に宗祇による抄出本『萬葉集』が存在し、宗祇はその歌書に注釈を加えていったとする見解がある。この見解は早く小島氏が述べるところであり、小島氏の見解を受けて両角氏が具体的に検討している。『宗祇萬葉抄』の成立過程の問題は本稿と直接関わるため少し詳しく述べておきたい。

小島氏、両角氏は、まず、『宗祇萬葉抄』奥書から本書より前に抄出本『萬葉集』が存在したことを推測する。その内容は次の通り。

①『宗祇萬葉抄』（以下、『萬葉学叢刊中世篇』による）

寫本ニ細註イアリ
私云、借用註本はさて少々書うつし侍ぬ。彼本すゑくの巻は事の外大やうにて、これそと思ふ事侍らぬま、愚本ぬき書のうち其理心え侍らぬ歌おほく侍り。しかれとも大かたにて先しるしをはる所也。此あらましを思ひたち侍る折ふし、思かけぬみたり心ちの事ありて、をこたりながら、猶我身ともなきやうに侍れとも、思ひたちし末をとけんとはかり書侍。侍ぬ。さためてかきちかへなとおほかるへく覺え侍りぬ。萬一御一見覽の人は御筆をくはへ給へき者也。（傍線は稿者。以下同じ）

冒頭の文意は取りがたいが、小島氏、両角氏によれば「私云」とは宗祇自身、「借用註本」は宗祇が借りた仙覚『萬葉集註釈』のことで、それを「愚本ぬき書」に適宜書き記していったとすれば、この冒頭が『宗祇萬葉抄』の奥書にあることが理解されるといふ。『宗祇萬葉抄』の注釈には『萬葉集註釈』の影響が強く認められ、また、

彼の注釈には「私云」と記す例も散見する。小島氏、両角氏の見解は『宗祇萬葉抄』の内容と奥書の関係に基づいた妥当な解釈と判断され、『宗祇萬葉抄』の注釈が『萬葉集註釈』を軸としていたらしいこともうかがえる。ただ、宗祇が『萬葉集註釈』に満足していないことも奥書に見え、そのことは『宗祇萬葉抄』の注釈の全てが『萬葉集註釈』の抜き書きではないことと関連しよう。なお、奥書には宗祇が注釈を記す最中に不慮の出来事（病気であろうか）に見舞われたようで、それをこらえながら注釈を書き続けていたことも記されている。

ともあれ、奥書の「愚本ぬき書」から、『宗祇萬葉抄』以前に宗祇による抄出本『萬葉集』の存在したことが想定されている。その上で、両角氏は『宗祇萬葉抄』の注釈からも抄出本『萬葉集』の存在が想定されると述べる。それが次の例（7—1—146）である。

②【宗祇萬葉抄】

めつらしき人を我家に住よしの岸のはにふをみんよしも哉

此きしのはにふと云事愚意心得かたきにより、自然注などをも見侍やとて抄書にくはへ侍れとも、此注にもなし。御存知の人あらはいはれを可書入給也。異本有。

注釈の内容は、萬葉歌の「岸のはにふ」が自分には理解できず、そのうち「注など」をも見ることと思ひ「抄書」に書き加えたが、「此注」にも見えない。もし、「岸のはにふ」を知る人がいたらな

らば、そのいわれを是非とも書き入れてほしいといったところであろう。「愚意」の「愚」とは宗祇のことと考えてよく、「注」「此注」が何を指すかが問題になるが、両角氏は「此注」が『萬葉集註釈』を指すと述べる。この点は①奥書からも首肯されることであり、そうすると、「自然注などをも見侍や」の「注など」にも『萬葉集註釈』を含むことが考えられる。

したがって、「岸のはにふ」に関心を持った宗祇は『萬葉集註釈』などの注釈書に説明があると予想し、この萬葉歌を「抄書」に加えたが、いざ実際に『萬葉集註釈』を見ると「岸のはにふ」の注釈はなかったという展開が考えられる。「岸のはにふ」の歌は①奥書の「愚本ぬき書」のうち其理心え侍らぬ歌の一例といえよう。そうすると、②の注釈の「抄書」は奥書の「愚本ぬき書」と対応し、この注釈には『萬葉集』から歌を選択する、そして、その後に『萬葉集註釈』を確認するという行為が認められることになる。つまり、両角氏の指摘のように、「抄書にくはへ」にも『宗祇萬葉抄』以前に存在した抄出本『萬葉集』が想定されることになる。

このように、①奥書、②注釈といった『宗祇萬葉抄』の記述から抄出本『萬葉集』が想定されており、その是非については考察の対象となる。そして、この問題に直接関係する歌書が本稿で述べる『萬葉集抜書』であり、本稿の目的は『萬葉集抜書』と『宗祇萬葉抄』との関係を明らかにするところにある。

三・『萬葉集拔書』と『宗祇萬葉抄』(その一)

『萬葉集拔書』は渋谷氏の『古文献所収万葉和歌集成 室町前期』に翻刻紹介されてはいたが、さほど関心を集めてこなかった歌書である。その存在に気づき『宗祇萬葉抄』との関係を始めて指摘したのは小川氏で、『萬葉学史の研究』の補注で本書が『宗祇萬葉抄』とかなり近い関係をもつと述べている。ただし、『萬葉集拔書』の具体的な内容などには言及していない。

現在、『萬葉集拔書』と題する歌書は複数現存するが、小川氏が、そして、本稿が取り上げる『萬葉集拔書』とは、石川武美記念図書館所蔵(旧お茶の水図書館所蔵)及び東大寺図書館所蔵のものである。両伝本の『萬葉集拔書』の書誌的事項についてはすでに渋谷氏が述べている。そこで、本稿は渋谷氏の見解をふまえるかたちで、石川武美記念図書館所蔵本の体裁等を確認しておく。石川武美記念図書館所蔵『萬葉集拔書』は竹柏園旧蔵、縦二五cm、横一八cmの袋綴本で、薄茶色の表紙に「萬葉集和歌抄出」と墨で記し、その下に二字ほど空けて「牡丹花撰歟」と墨で記す。「牡丹花」とは牡丹花肖柏(一四四三〜一五二七)のことで、室町時代後期に活躍した連歌師・歌人である。表紙を開いた第一紙表から本文が始まり遊紙はない。内題は「萬葉集拔書」で、每半葉十行で本文を記す。な

お、本文は底本との校合が丁寧になされており、書写の際の誤脱・誤写が朱によって修正されている。

また、第一紙表には「靄隅文庫」及び「横地氏珍藏記」の朱印が押されている。「横地」とは横地石太郎のことで金沢出身の教育者。「靄隅文庫」も横地の蔵書印である。彼は東京開成学校卒業後、明治二十七年、三十三歳で松山中学の嘱託教諭となり、翌明治二十八年には松山中学の教頭となる。この教頭時代の同僚に夏目漱石がおり、彼は『坊っちゃん』に登場する「赤シャツ」のモデルともいわれている。なお、表紙と第一紙の間には本文とは別筆でメモ書きのようなものが挟まれている。一部判読しにくい部分もあるが、その内容は『萬葉集拔書』が誰の著作か分からず、家本の「牡丹花集」(『奈良之葉』か)に似ているが、実際に歌の有無を比較すると『萬葉集拔書』に見える「牡丹花集」の歌は少ないとある。本文と別筆だが筆者は不明である。

『萬葉集拔書』には「文明八年丙申五月廿一日 宗重」の奥書がある。「宗重」なる人物は未詳だが、この名は墨で塗り潰されている。その理由は判然としないが、石川武美記念図書館所蔵本が文明八年(一四七六)書写の本文を伝え、渋谷氏の書写状況に古態が認められるという見解も首肯できるため、奥書の年代と同時期の可能性を含め、室町時代後期から戦国時代あたりの書写と思われる。『宗祇萬葉抄』の成立は文明六(一四七四)年から文明十四(一四八二)

年の間と考えられている。本書が宗祇の著作であり『宗祇萬葉抄』と密接に係るならば、宗祇の生存に近い時期の書写にかかる宗祇関連の歌書という点で極めて重要な資料といえる。

さて、『萬葉集拔書』は『萬葉集』から萬葉歌を一〇六九首抄出した歌書で、抄出した萬葉歌を『萬葉集』の歌順に従って配列し、幾分漢字を交えながら主に仮名で表記する。また、抄出した萬葉歌には『萬葉集』に存する題詞や左注もおおむね記されており、その表記は漢字である他、歌本文には萬葉歌の漢字本文の一部が傍記された例も散見する。一方、注釈はごくわずかに存するのみである。

その上で、『萬葉集拔書』と『宗祇萬葉抄』を比較したとき、まず注目されるのが両書の近さである。『萬葉集拔書』の総歌数は一〇六九首であるが、そのうち『宗祇萬葉抄』に認められない萬葉歌はわずか二首にすぎない。『宗祇萬葉抄』には『萬葉集拔書』のほぼ全ての萬葉歌が含まれる。また、『萬葉集拔書』が萬葉歌は仮名漢字交じりで、題詞・左注は漢字で表記することは前述したが、これも『宗祇萬葉抄』と同様で、萬葉歌に傍記された漢字本文も共通する例が多い。そして、両書の題詞・左注の本文もよく一致し、なかには次のような例（三五四八）も認められる。

③【萬葉集拔書】

神龜二年乙丑春三月辛三香原離宮時得娘子哥

此よはのはやくあくれはすへをなみ秋のも、夜をねかひつるか

も

右作者未詳

【宗祇萬葉抄】

神龜二年乙丑春三月辛三香原離宮時得娘子歌

此夜半の早くあくれはすへをなみ秋のも、夜をねかひつるかも

右作者未詳

【萬葉集】（『補訂版 萬葉集』（埜書房）による）

① 神龜元年甲子冬十月辛紀伊國之時為贈從駕人所詠娘子作歌一首并短歌
（五四三～五四五題詞）

② 二年乙丑春三月三香原離宮之時得娘子作歌一首并短歌 笠朝臣金村
（五四六～五四八題詞）

③ 五年戊辰大宰少貳石川足人朝臣遷任饒于筑前國蘆城驛家歌三首
（五四九～五五一題詞）

④ 右三首作者未詳
（五四九～五五一左注）

③の例は歌本文・題詞・左注全てが『萬葉集拔書』『宗祇萬葉抄』とも同本文である。だが、③に見える題詞・左注を『萬葉集』と比べるといくつか違いが見出せる。まず、『萬葉集拔書』『宗祇萬葉抄』の題詞はその内容から『萬葉集』の題詞②に該当すると考えられる。ところが、両書の題詞は「神龜」から始まり、『萬葉集』の題詞②は「二年」から始まる。この場合、『萬葉集』の②の一つ前の題詞①に「神龜」とあることの影響が考えられる。『萬葉集拔書』『宗祇萬葉抄』

の「神龜」は、この題詞④の「神龜」をふまえて題詞⑤の冒頭に付け加えたもので、ここに両書そろって情報の追加による『萬葉集』本文の変更が認められることになる。

次に、『萬葉集拔書』『宗祇萬葉抄』はともに作者名がなく左注に「作者未詳」と記す。ところが、『萬葉集』によると、当該歌は長歌（五四六）の後にある反歌の二首目で作者は笠朝臣金村である。

両書にはあるべき作者名が認められないことになり、その代わりに『萬葉集拔書』『宗祇萬葉抄』には「右作者未詳」が左注として記されていると思われる。そして、この左注は『萬葉集』の左注④を意識したものと考えられるけれども、『萬葉集』では五四九・五五〇・五五一に関する左注であって当該歌（五四八）とは全く関わらない。つまり、当該歌の作者名に関する『萬葉集』との異なりもまた両書そろって認められることになる。⁶⁾

また、『萬葉集拔書』にはわずかに注釈が存すると述べたが、これも『宗祇萬葉抄』に確認される。一例（七一四・一七）を挙げよう。

④『萬葉集拔書』

羈旅哥 此哥は撰津国也

なこの海を朝こきくれば海中にかこそ鳴なるあはれそのかこ

【宗祇萬葉抄】

羈旅

なこの海を今朝こきくれば海中にかこそ鳴なるあはれそのかこ

両書を確認すると、『萬葉集拔書』は「羈旅哥」の下に、『宗祇萬葉抄』は「なこの」の右傍に注釈が記されている。「撰津国」と「津国」では本文が少し異なるけれども同内容と見てよい。このように、『萬葉集拔書』に見える少数の注釈は『宗祇萬葉抄』に全て確認できる。なお、この注釈は仙覚『萬葉集註釈』が当該歌に「ナコノウミ撰津国」と記すことをふまえたものであろう。⁷⁾

このように、『宗祇萬葉抄』は『萬葉集拔書』のほぼ全ての歌を含み、萬葉歌に記された題詞・左注の変容も一致し、共通する注釈も確認されるなど、両書は極めて近い関係にある。その一方で、『宗祇萬葉抄』は『萬葉集拔書』よりも約九〇首ほど萬葉歌が多い。この違いは、抄出本『萬葉集』に注釈を記す過程で歌が追加されたと考えられる一方で、『宗祇萬葉抄』から注釈や萬葉歌の一部を削除し、抄出本『萬葉集』を再構成したとも考えられる。『宗祇萬葉抄』には萬葉歌とその注釈のみを抄出した略本といわれるものも現存する。両書の関係が「抄出本↓注釈書」なのか、あるいはその逆なのかについては確認しておく必要がある。

四・『萬葉集拔書』と『宗祇萬葉抄』（その二）

『宗祇萬葉抄』以前に宗祇による抄出本『萬葉集』が存在したという推測は、小島氏、両角氏による見解であり、その根拠が①奥書

や②注釈にある「愚本ぬき書」「抄書にくはへ」という表現であることは前述した。そこで、『宗祇萬葉抄』の注釈を確認すると、これと類似する表現を他に三例見出すことができる。

⑤【宗祇萬葉抄】

あしの葉に夕霧たちて鴨かねの寒き夕し猶や忍はん

歌に儀なし。猶やしのはんは戀の心也。鴨か音とよめる間

書入侍り。此註にも此歌はやさしき歌也とかける、さもと見え侍りぬ。

⑤の例（14三五七〇）には①②にも認められた「此註」が確認されるが、これは仙覚『萬葉集註釈』に「此歌ハコトハワカヒコ、ロハセヤサシキ哥也（「ワ」は「ツ」の誤写）」と同内容の注釈が認められる。この例からも①②の「此註」は両角氏の指摘するように『萬葉集註釈』を指すと考えられる。それとともに、⑤には「鴨か音とよめる間書入侍り」と記されている。宗祇が学び培ってきた王朝和歌の知見では鴨の鳴く声を詠んだ歌は思いつかなかつたのであろう。その珍しさとともに、仙覚の「やさしき歌」という見解に同意見であった宗祇はこの萬葉歌を書き入れて、その理由を記したものと考えられる。そして、『宗祇萬葉抄』に書き入れられたと記された⑤の歌と注釈は『萬葉集抜書』には認められないのである。

⑥【宗祇萬葉抄】

住の江のいてみの濱の柴なかりそね乙めらかあかものすそのぬ

れゆかんみん

歌に不審なし。柴をよめるかめつらしさに書入侍ぬ。右の歌皆人丸集に出。

⑥の例（7一二七四）は「歌に不審なし」と述べ、宗祇にとって

この萬葉歌の表現や歌意には問題とすべきところがなかつたと考えられる。つまり、注釈を記す必要のない、『宗祇萬葉抄』に収めなくてもよい萬葉歌であつたといえる。だが、あえてこの萬葉歌を収めた理由を「柴をよめるかめつらしさに書入侍ぬ」と記す。これも⑤と同様の理由から『宗祇萬葉抄』に書き入れられた歌であり、しかも、その歌と注釈は『萬葉集抜書』に見出すことができない。

⑦【宗祇萬葉抄】

雲雀あかる春へとさやに成ぬれば都もみえず霞棚ひく

右歌家持作也。すかたおもしろく覺て書加たり。

⑦の例（20四四三四）も「すかたおもしろく覺て書加たり」と記すことから、⑤⑥と同様の理由、つまり、家持の歌が秀逸であるために書き加えられた歌であることが分かる。そして、⑦も『萬葉集抜書』には見出すことのできない歌と注釈である。

このように、⑤⑥⑦の例は『宗祇萬葉抄』の時点で新たに書き加えられた萬葉歌・注釈と考えられ、なおかつ『宗祇萬葉抄』と密接な関係を持つ『萬葉集抜書』には認められない。このことは、自ずと『萬葉集抜書』が『宗祇萬葉抄』以前に存在した抄出本『萬葉集』

であることを示唆している。また、「両書に見える萬葉歌の増減に関していえば、次の例も『萬葉集抜書』と『宗祇萬葉抄』の前後関係をうかがわせるありようである。

⑧【宗祇萬葉抄】卷十五部分（題詞の傍記は省略した）

天平八年丙子夏六月遣使新羅國之時使人等各悲別贈答及海路之上働旅陳思作歌並當所誦詠古歌少々抄之

3578 むこの浦の入江のす鳥はく、める君をはなれて戀にしぬへし
入江の巢鳥を我身にしてよめり。女の歌也。

▼3580 おほ舟に妹のる物にあらませはく、みもちてゆかまし物を

是は返事也。新羅の使なれば、かゝる船に妹をのする事なきを歎きてよめり。

3581 君が行海邊の宿に霧た、はあがたちなけいきとしりませ
是も女の歌也。

3584 秋さらはあひみん物をなにかも君にたつへく歎しまさん
此歌の心は、秋さらは歸こん物をとなくさめたる心也。

3586 わかれなはうらかなしけんあか衣したにをきませた、に逢まて
に

3587 我ゆへにおもひなやせそ秋風のふかんその月あはんものゆへ
3588 はるくとおもほゆるかもしかれともあたし心をわかもたなく
に

右六首贈答

【萬葉集抜書】卷十五部分

遣使新羅使人等各悲別贈答及海路働情陳思并當所誦之上呂哥

3578 むこの浦のいりえのすとりはく、める君をはなれて恋にしぬへし

▼三五八〇↓ナシ

3581 君が行うみへのやとに霧た、はあかたちなけいきとしりませ
3584 秋さらはあひみんものをなにかも霧にたつへくなけきしまさん
ん

3586 わかれなはうらかなしけんあか衣下にをきませた、に逢まてに

3587 わか故におもひなやせそ秋かせのふかんその月あはんもの故

3588 はるくとおもほゆるかもしかれともあたし心のあかもたなく
に

右六首贈答

⑧の例は『宗祇萬葉抄』『萬葉集抜書』ともに卷十五の巻頭歌から始まり、本稿では「右六首贈答」の左注がある部分までを示している（ただし、『宗祇萬葉抄』は目録、『萬葉集抜書』は題詞の本文を最初に載せる）。その上で、「右六首」をふまえてそれぞれの歌数を数えると、『萬葉集抜書』の歌数が左注と一致する六首に対して、『宗祇萬葉抄』は歌数が一首多い七首となり左注と合わない。その理由は『宗祇萬葉抄』にだけ二首目の「おほ舟に」歌（三五八〇）が存在することである。つまり、『宗祇萬葉抄』ではこの萬葉歌と

注釈が追加されたために歌数が変わったのだが、萬葉歌が増えた上での左注が修正されなかったため「六首」のままで残ったことが考えられる。この例は「書入・書加」という表現はないものの、明らかに『萬葉集拔書』が『宗祇萬葉抄』に先行する歌書であることが見てとれる。

そして、次の例は『宗祇萬葉抄』の特徴の一つであると同時に、『萬葉集拔書』が『宗祇萬葉抄』に先行する抄出本『萬葉集』であることを示していると考えられる。

⑨【宗祇萬葉抄】卷三部分

363 みさこゐるあら磯に生るなのりそのなのりはつけよ親はしるとも

是は戀の歌也。親はしるとも云は、親のいさむる事なれはかくよめり。

① 355 しつの岩屋の歌は吉野也。大なんちの神のましますかとよめり。

② 374 雨ふれはさゝむと思ふかさの山と云歌も御笠の山の次にあり。

三笠の山を笠の山ともいへる歟。石上乙丸朝臣の歌也。

③ 376 秋津羽の袖ふるいもあきつはとうすき物也。乙女などの袖のうつくしきうすものをよめり。

④ 377 あを山の嶺のしら雲朝にけにつねにみれともめつらしき我君

歌の心は、青山に白き雲のたちたるは目につくへき事也。

朝にけには朝夕也。古今には朝なけにといへり。此山の雲

の白きことく、朝夕みれともあかぬ君そとよめり。

笠朝臣金村鹽津山作歌

365 しほつ山うちこえゆけは我のれる馬そつまつく家こふらしも

【萬葉集拔書】

363 みさこゐるあらいそに生るなのりその名のりはつけよおやはしるとも

① 355 ↓ ナシ ② 374 ↓ ナシ ③ 376 ↓ ナシ ④ 377 ↓ ナシ

笠朝臣金村鹽津山作哥

365 しほつ山うちこえ行は我のれる馬そつまつく家こふらしも

⑧の例は、卷三の部分を『萬葉集拔書』と『宗祇萬葉抄』で比較したものである。最初の歌(363)と最後の歌(365)は両書ともに確認され異文も認められない。ところが、その他の点では『宗祇萬葉抄』にのみ見える①～④のありようから、両書の相違点がいくつか確認される。

まず、『宗祇萬葉抄』ではその間にある①～④の歌・歌句は三五五・三七四・三七六・三七七と『萬葉集』の歌順通りに並ぶものの、最初の歌(363)と①(三五五)、最後の歌(365)と②③④(三七四・三七六・三七七)は『萬葉集』とは逆順である。このように、『宗祇萬葉抄』のみにある萬葉歌の多くは、その直前、直後にある両書共通の萬葉歌と歌の順序が『萬葉集』と前後するけれども、『宗祇萬葉抄』のみの萬葉歌歌群の中では『萬葉集』通りに並ぶ例が少

なくない（『萬葉集拔書』はほぼ『萬葉集』の歌順と同じ）。

次に、(a)(b)(c)は萬葉歌の歌句を示すが、このような短歌や長歌の一部を提示する例が複数認められることも『宗祇萬葉抄』のみの特徴である（『萬葉集拔書』では一首全てを示す）。

また、(a)～(d)には題詞が記されていないが、これも『宗祇萬葉抄』にのみ見える歌の性格の一つである（『萬葉集拔書』は『萬葉集』に対応した題詞、左注を有する歌が多い）。

そして、最も注意されるのが(a)～(d)を始め『宗祇萬葉抄』のみに見える萬葉歌のほとんどが注釈を伴うことである（『萬葉集拔書』の注釈の数は極めて少なく、注釈への意識がかなり希薄である）。

以上のことから、『宗祇萬葉抄』のみに認められる(a)～(d)の歌（歌句）と注釈は、注釈とともに示す必要のあった歌として追加されたものと考えられ、これらと同様・類似する例もまた『宗祇萬葉抄』の作成時に書き加えられたものと考えられる。『宗祇萬葉抄』以前の宗祇による抄出本『萬葉集』の存在は小島氏、両角氏によって想定されていたが実際に現存し、それに該当するのが『萬葉集拔書』であると判断してよいだろう。

五・まとめ

宗祇が『萬葉集』に関する歌書を作成する上で最初に行ったこと

は萬葉歌を選択することであった。そして、選択した萬葉歌の一首全体を仮名漢字交じりで記し、題詞や左注も漢字表記で萬葉歌とともに載せた。その内容は『萬葉集』に従いつつ、その規模を縮小した萬葉選歌集であり、それが『萬葉集拔書』である。その上で、仙覚『萬葉集註釈』を軸に自らの関心に従って適宜注釈を書き加えていったのが『宗祇萬葉抄』である。なお、『宗祇萬葉抄』の①奥書には「さためてかきちかへなとおほかるへく覺え侍りぬ。萬一御一見^(覽)の人は御筆をくはへ給へき者也」とある。ここには『宗祇萬葉抄』が誰かに読まれることを予想している宗祇が想像される。彼は『萬葉集拔書』も誰かに読まれること、あるいは注釈を記すことも想定していたかもしれない。両書には宗祇の個人的関心だけでなく、他者の求めに応じたなど、読まれることへの意識の有無についても考慮されるべきであろう。

本稿は先行研究の驥尾に付き、『萬葉集拔書』という従来注目されてこなかった歌書が、宗祇によって作成された抄出本『萬葉集』であり、『宗祇萬葉抄』の土台となった歌書でもあったことを具体的に明らかにしたまでである。『萬葉集拔書』を加えた上での歌本文の性格、抄出の意図、注釈との関係など、宗祇の『萬葉集』享受の本質に関わる問題はこれからの課題である。そして、本稿で述べた『萬葉集拔書』は中世における『萬葉集』享受という観点からも看過できない歌書の一つであると考えている。

注

- (1) 由阿と二条良基との関係については、小島憲之氏「由阿・良基とその著書」(『萬葉集大成 文獻篇』一九五三) など参照。
- (2) 荒木尚氏『言塵集』―本文と研究―(汲古書院)。
- (3) 室町時代における『萬葉集』享受については、小島憲之氏「室町期に於ける萬葉集 附、研究年表草案」(『国語国文』十二巻十号(一九四二・一〇) など参照)。
- (4) なお、『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー)の「範政」(久保木哲夫氏執筆)には、範政が応永二十〜三十年代に典籍を大量に書写校合しており、了俊との縁で親本を入手した場合も多かつたらしいと述べられている。ただし、了俊と禁裏御本との関係は現時点では判然としない。
- (5) 近年、池原陽齊氏が三条西実隆『萬葉一葉抄』の本文が寛元本系に近いことを指摘している(『萬葉一葉抄』と京都大学本『万葉集』―寛元本性格をめぐって―)(『万葉集伝本の書写形態の総合的研究 論文編』(二〇一七・三))。すでに指摘されていることではあるが、『実隆公記』には文明十六(一四八四)年十一月に、宗祇から実隆に『萬葉集』(巻一〜六欠)が送られているという記録が見える。『萬葉一葉抄』が寛元本性格を有することは、自ずと宗祇の『萬葉集』の性格を示唆しているようだが、この点については別稿で改めて述べる。
- (6) 『萬葉集拔書』『宗祇萬葉抄』の作者名が『萬葉集』と異なる理由は⑧の題詞に由来すると思われる。⑧の題詞は神宮文庫本、西本願寺本、温故堂本では「得娘子笠朝臣金村作歌一首并短歌」とあるが、その他の伝本は「得娘子作歌一首并短歌」とあって次行に「笠朝臣金村」を記す。『宗祇萬葉抄』『萬葉集拔書』の題詞は後者に近い。そうすると、両書のありようは、使用した『萬葉集』では
- 「笠朝臣金村」が脱落していた(紀州本は「笠朝臣金村」がなく別筆で補われる)、もしくは「笠朝臣金村」を長歌のみの作者名と捉えたことが原因として考えられる。
- (7) 両書には歌本文に少し異なりが認められるが、『萬葉集拔書』の方が『萬葉集』と対応する。なお、仙覚『萬葉集註釈』の本文は『仁和寺藏萬葉集註釈(京都大学国語国文学資料叢書別巻二)』(臨川書店)による。